

「続 青春？」

(1984 社内報掲載)

二年前のこと。私の三十代終焉の思い出にと、それまで描きためていた絵の中から50点ばかり選び出して、お恥ずかしながら個展を開いた。四十歳の誕生日を迎える二週間前であった。冷やかに来た人、義理で来た人、それにまた、お隣りの会場の人気にも便乗出来たお陰で、予想以上にたくさんのお客様に観て頂いた。何よりうれしかったのは、学生時代の友人や先生方が、はるばる駆け参じてくれたことだ。絵を前にしての古い話なんぞは、角が立たず、趣があつていい。

私が小学校のとき、担任の先生が当時としてはめずらしい油絵をやっておられた。その先生に絵を勧められ本気でやり始めたのである。中学生のとき、「手足の不自由な子をなぐさめる絵のコンクール」の募集があり、級友を誘って出品したところ、私の絵が運良く厚生大臣賞を授かり、級友の健闘もあつて、学校賞まで頂いた。賞品は、当時最新式の幻灯機であつた。美術の先生もさぞかしびっくりしたことであろう。その先生と二人で東京での表彰式に臨み、完成したばかりの東京タワーにも案内され、絵のことは忘れ狂喜した思い出がある。高校、大学では美術クラブに入ったが、さすがにあちこちから練達の士が集まっていた。もう大人の世界だった。この頃から100・150号…といった、とてつもなく大きな抽象画を描いては、県展・公募展に出品し、友人と賞の取りっこをしていた。おそらく芽吹き始めた心の高揚の一時期ではなかったか

と思う。さて、入社してしばらくの間はこの余波が残ってはいたが、体力の衰えか、会社人としての自覚が出始めたせいかな、それとも青春の灯が陰り始めたのか？ 描く絵が次第に小さくなり、まともになってきた。抽象画の場合、小さな点ひとつ、細い線の一本が絵の構成と空間感を決める…緊張を持続しなければできない。はっきり言って、妻子と“七人の敵”をもつ男の手に負えなくなったのだろう。今は、バラの絵の中に人間関係のカラミを見たり、建物の絵を描きながら外装仕上げの具合や工事費のことなどを想像したり、世渡りの哀感を深めながら絵筆を動かしている。先日読んだある本で「青春とは、人生のある時期をいうのではなく、心のあり方をいう」という米国の詩人の言葉を知った。ヨシ！これでいこう…と心に誓ったことである。



水差しのある静物 F 8

幸い、あと数日で私の厄も明ける。最後に、油絵の経験のある人、無い人を問わず「絵画部」への入部をおすすめします。初めて道具をそろえた人からベテランを含め、老若男女、汚いながらも狭い？部室で愉快地絵を描いています。スケッチ旅行・ヌードデッサン会…など、中には絵のことを忘れ狂喜する人もいますが、当部では絵の出来に関しては、余り難しいことば問わないことにしています。ひとりでも多く、油絵に親しむ人が増えればそれでもいいと思う。あとは、キャンバスの上で、誰にも制約されることのない自分なりの闘いが始まるのだから。『青春？』